

全国まちづくりカレッジの開催について

1 「全国まちづくりカレッジ」との連携について

「全国まちづくりカレッジ」とは、地域（商店街や商工会議所、地元市町村やNPO等）と協働したまちづくり活動に携わる、日本各地の学生や大学関係者等が一同に会し、お互いの交流を図り、自分たちのまちづくり活動の学習や実践に結びつけるために開催されるまちづくりの全国大会です。

平成 24 年 11 月 17 日（土）～18 日（日）に開催された第 13 回「全国まちづくりカレッジ 2012 in 伊勢」は、平成 23 年度に実施した「みえの現場・すごいやんかトーク大学編」で、皇學館大学の学生が、自分たちの活動内容と交流の場である全国まちづくりカレッジについて紹介した際、知事から「卒業までに三重県で開催出来るようにがんばって見たらどうか」という提案を受け、学生自らが開催校として立候補し、誘致したものです。2 日間のプログラムのうち、18 日（日）に開催した交流フォーラムについては、県の「高等教育機関と地域との連携の仕組みづくり推進事業」と連携して実施しました。

今年度は、皇學館大学を含めて全国から 14 校、約 200 名が参加しました。また、県内からは、四日市大学及び宇治山田商業高校も初参加しました。

※「第 13 回全国まちづくりカレッジ
2012 in 伊勢」

日時：平成 24 年 11 月 17 日（土）～
18 日（日）

場所：伊勢市観光文化会館ほか

主催者：全国まちづくりカレッジ 2012
in 伊勢 実行委員会

協力：三重県、伊勢市、外宮参道発展
会他



2 全国まちづくりカレッジ 2012 in 伊勢 実行委員会について

伊勢での開催にあたり、皇學館大学の「宇治☆山田プロジェクト」として活動する学生を中心に実行委員会を組織し、今年度の全国まちづくりカレッジのプログラムの企画・運営を行いました。10 年目という節目の時期となった今年は、学生と地域のみならず、県、市との官民一体となったまちづくりの輪（和）を伊勢から全国へ広げていきたいという思いから、2 日目に、全国から集まった学生グループの代表と三重県知事が、「まちづくりの広域連携の可能性」というテーマについて意見交換する交流フォーラムを企画し、開催しました。

1) フィールドワークの実施について

一日目は、外宮参道の関係者の皆さんにご協力いただき、フィールドワークを実施しました。また懇親会では、伊勢音頭すまいる連などにご協力いただき、伊勢木遣りの披露や伊勢音頭の体験を通して伊勢文化の発信を行い、全国から集まった参加者との交流を図りました。

2) 事例発表会及び交流フォーラムについて

二日目は、参加大学による活動内容の事例発表会及び交流フォーラムを開催しました。

① 事例発表会について

お互いの活動内容を紹介し、それぞれの活動に生かしていくことを目的に、参加校のうち、11校が活動報告を行いました。

活動報告校：東海大学、京都文教大学、大阪人間科学大学、岐阜経済大学、名古屋学院大学、明治学院大学、香川大学、松本大学、星城大学、四日市大学、宇治山田商業高校



② 交流フォーラム テーマ「まちづくりの広域連携の可能性」

全国まちづくりカレッジ開催から 10 年目という節目を迎え、各大学の学生によるまちづくり活動を点から線へ、線から面へと展開することの可能性を探り、意図的に展開するために今後必要な仕掛けなどについて意見交換を行いました。

各大学の代表と三重県知事が、学生の地域活動を広域的に連携することの意義やその際の行政の役割などについて、それぞれの思いを話しました。

コーディネーター：いせ市民活動センター 浦田 宗昭 氏

コメンテーター：三重県知事 鈴木 英敬

参加大学：東海大学、京都文教大学、大阪人間科学大学、岐阜経済大学、名古屋学院大学、明治学院大学、香川大学、四日市大学、皇學館大学（9校）



■ 参加した学生からの意見

<広域連携の意義>

- 交流や情報共有に止まらず、一緒に地域に入って同じ活動をするすることで、大学間の絆が深まり、連携ができる。自分の地域だけでなく、いろいろな地域で情報を集めたりできることが大きい。(岐阜経済大学)
- 地域と連携することで、大学内だけの活動では接することができない地域や役場の人などと交流することができ、やりがいも達成感も責任感も増してくる。大学生は、大人と子どもをつなぐ役割も果たすことができる。(香川大学)
- 他大学との交流や連携により、自分たちの活動の足りないところを知ることができ、もっといいものを創りたいというやる気を高めるきっかけとなる。(名古屋学院大学)
- 地域をつなぐ、子どもをつなぐ架け橋となるように、地域交流、世代間交流を進める役割が学生にはある。学生は斬新なアイデアを持っていて、行政やNPOの固定観念を打ち破ることも期待されていると考えている。(東海大学)
- 連携とは、共通の課題に対して共に実践していくことで、交流というのは、お互いの良さとか課題を知るための機会だと考えている。そこから大学同士、地域同士のつながりに発展していく。学生は地域の人々が当たり前と感じていることに光を当て、その魅力を再発見してもらうことにある。(京都文教大学)

- 他の地域の取組やプロセスを知ることによって、新しい価値観や発見につながり、それが新しい活動に生かせるのではないか。(明治学院大学)
- 地域と連携した取組を応援するために、全国に発信し、そこからまた興味を持った人たちに広がっていくという相乗効果が期待できる。(四日市大学)
- 他大学の取組を自分たちの地域で広げていくことでも地域は活性化するのではないか。学生は、自分の専門外のことをすることで、その経験がプラスとなる。(大阪人間科学大学)
- 活動を後輩に引き継ぎ、これまでの活動を軸に枝分かれして、どんどん広域につなげて連携していきたい。(皇學館大学)
- 自分たちは、宇治茶を使ったイベントをやっているが、宇治茶だけでなく、全国的に急須でお茶を飲むということが減ってきている。宇治茶を広めるだけで終わらず、日本茶を飲むことを広めていくということもできるのではないか。課題点が見えてきたら、同じ方向に向かっていけるのではないか。(京都文教大学)

<行政の役割>

- 学生だけではなかなか難しい広報活動の支援をお願いしたい。
- 情報発信について協力してほしい。(ホームページや公的な場所への資料の配付など)
- 学生は熱意はあるが、なかなかチャレンジして生かす機会がないので、主体的にまちづくりを行える環境をバックアップしてほしい。
- 学生だけでは限界があるので、自分たちが地域で仕掛けた仕組みを行政や地域の人たちが受け皿となって一緒に続けていけるようにサポートしてほしい。
- 効率性や平等性だけを求めるのではなく、地域の持つ良さや魅力に寄り添うまちづくりをお願いしたい。
- 学生がこれまで取り組んだことなどをまとめて、紹介してほしい。
- 行政と学生の距離がもっと縮まればよい。



■知事からのコメント

- 行政の役割として情報発信の支援という意見が多かったが、行政が持っているツールをどんどん使ってもらったらいい。逆に学生の皆さんには、行政ではなかなかアプローチできない人たちへの発信、例えば、フェイスブックやツイッターを使った情報発信など、期待している面もある。
- 行政は、どうしても窓口などが縦割りになっていて、どこに相談したらいいのかわからないことも多い。学生を応援する際の窓口を明確化していくことも学生の活動を応援することにつながる。
- 行政職員も学生と話をすることで勉強になることが多い。行政職員は、事業を継続していくうちに、なぜこれをやらなければならないのかということ深く考えずに引き継いでやっている場合もあるので、学生側から素朴におかしいと感じたことはぶつけていってほしい。
- 宇治茶から日本茶へと広げるという意見があったが、例えば、お茶だけでなく、急須やお茶をおいしく飲むためのお菓子などとも合わせたら、大きなムーブメントになったりするのではないか。手法も大事だが、何のためにやるのかということをよく議論することが大切。
- 一番気になったのは、継続性をいかに確保するかということ。リーダー的な役割を果たす人がいなくなったら活動がしぼんでしまうということにならないように、継続性を考えてもらう視点を組み込んでいってほしい。